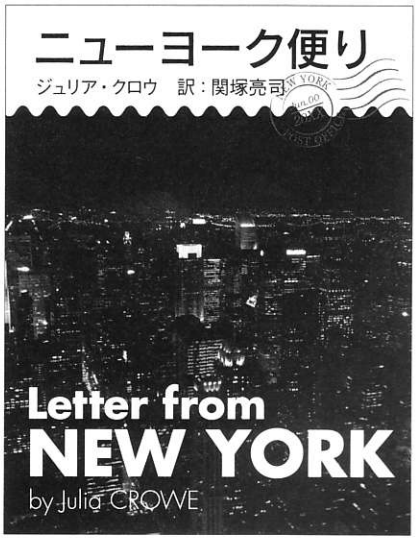

●ニューヨーク・ギターセミナー

今年のニューヨーク・ギター・セミナーは、7月9日から14日まで、マンネス音楽院で開かれた。テーマは『経営者的感覚で、公演の機会を作り出せる演奏家を目指して』だった。

招聘された教授陣と演奏家は、シャロン・イスビン、エリオット・フィスク、カルロス・バルボサ＝リマ、ザイラ・メネセス、アンティゴーニ・ゴーニ、マイケル・アンドリアッチョ、ジョアンヌ・カステッラーニ、リチャード・パターソン、ラリー・デル・カサーレ、ニューマン＆オルトマン・ギターデュオ、フランシスコ・ロルダン、セリル・レフィク・カヤ、ピエール・フェレイラ・マンシーリャ、イェン・リー、マリアーノ・アギーレ、カルロ・ヴァルテ、マイケル・ギルシニャン、アルバロ・メンディサバルである。

このイベントのオープニングは、アメリカン・ソサエティーで開かれたイブニング・コンサートだった。カルロス・バルボサ＝リマが、マドリゲラ、フエンテス、ボラース、ガーシュウィン、ピシンギーニャ、ジョビンの作品を、彼自身の編曲で演奏した。

ザイラ・メネセスは、ポンセとブローウェルの作品を演奏。続いてフランシスコ・ロルダン、カルロ・ヴァルテ、レックス・ペニンカサによるギターとウード＆打楽器のトリオで、マルセル・カリフとラファエル・ランデストイの作品を演奏した。

今回このイベントに参加した53名の受講生と20名の聴講生の国籍は、メキシコ、ブラジル、コロンビア、ペルー、韓国、中国、ドイツ、ベルギー、バミューダ、カナダ、トルコ、ギリシャ、スコットランド、アイルランドと多岐にわたり、参加者の3分の1以上が米国からの参加だった。セミナーの5日間は、アンサンブルのリハーサル、誰でも自由に演奏できるセッション、景品が当たる抽選、受講生によるコンサートに加えて、マスタークラス、講習会、イブニング・コンサートが行なわれ、非常に充実したプログラムとなった。

初日の講習会は、エリオット・フィスクが『演奏技術の詩的感興』というタイトルで行なった。ギター・テクニックの研究が、退屈な作業ではなく芸術的な表現形式であることを教える講義だった。彼は、教室内のギタリストを2つのグループに分けて、クレッシェンドとデクレッシェンドのスケール練習をさせ、

「ギタリストにとって、アナリーゼは格好の避難所になっている。感性が求められているのに、スコアを知的に解釈することに拘り、考えすぎている。最高の音楽は、知性ではなく、感性から生まれてくる。頭ではなくハートで作られるものだ。もっと自由に、オープンになるべきだ」と語った。

その晩のコンサートは、デュオのオンパレードで、まずニューマン＆オルトマン・ギターデュオが、デュージャン・ボグダノヴィチの〈この蛙には羽が無い〉、メルツの〈夕べの祈り〉、〈マズルカ〉、〈舟歌〉、〈タランテラ〉、ポンセの〈スケルツィーノ・マヤ〉、〈スケルツィーノ・メヒカーノ〉、〈スケルツィーノ〉を演奏した。

ジョアンヌ・カステッラーニとマイケル・アンドリアッチョのギターデュオは、『南の魂』というタイトルのプログラムを披露した。演奏曲目は、アドリエン・ポリティ《タンゴ・デュオ》より〈Mate amargo〉、〈Luisina〉、〈La Petisa〉の3楽章、マルセロ・コロネル〈ミロンガルガーダ〉と〈ジェルビータ・コンパネーラ〉、アルフォンソ・モンテス〈ミロンガ～ピアソラへのオマージュ〉、コー・プフィスター〈アルゼンチン民謡による変奏曲〉であった。

カルロス・バルボサ＝リマとラリー・デル・カサーレのギターデュオは、ジョビン〈バラに降る雨〉、〈貴女なしでは生きられない〉、〈フェリシダージ〉、ガーシュウィン〈プレリュード第3番〉、ブローウェル《ミクロピエサス》より〈第4番〉、〈第2番〉、〈第3番〉、ゼキーニャ・ジ・アブレウの〈ティコティコ〉を演奏した。

そして、この晩に登場した3組のギターデュオ全員で六重奏団を組み、ジョアン・ペルナンブコ〈鐘の音〉、ヴィラ＝ロボス〈帆船〉、シテパン・ラック〈ルンバ〉を演奏した。

翌日は、講習会が2つ行なわれた。まず、『音楽的キャリアの多様性を生みだすために選ばれた道』と題して、リチャード・パターソンが司会をし、ゲスト講師としてラリー・デル・カサーレ、フランシスコ・ロルダン、ローラ・オルトマンが参加した。リチャード・パターソンとゲスト講師たちは、それぞれ仕事の多様性の価値を強調した。フランシスコ・ロルダンは、非常勤講師として第二外国語である英語を教えてきたが、その経験が自身の指導力と演奏能力を発展させ、最終的に常勤講師の地位を得ることができた。ラリー・デル・カサーレは、20年以上ニューヨーク市民に対して音楽を指導してきたが、スケジュールが自由に決められたので、演奏活動とツアーを行なうことが出来たという。ローラ・オルトマンは、プリンストン大学における教職のこと、マイケル・ニューマンとのデュオで認められたマンネス音楽院の客員アンサンブル講師のこと、恒例のラリタン・リバー音楽祭とニューヨーク・ギターソサエティーの運営について話した。リチャード・パターソンがギターに興味を持ったのは、ベトナム戦争に徴兵されてからのことで、ベトナムで手に入れたギターは、散弾の破片の痕が残るスチール弦のギブソンだった。戦後、2年間スペインに留学してギターを勉強してから、サンフランシスコ湾沿岸に住んでクラシックギタリストの招聘業務を始めた。こうしてパターソンは、オムニ・ギター・コンサート・シリーズを始めた。それから今年で33年になる。

次に行なわれたレクチャーは、『あなたの運を作り、多様性を管理する方法』と題して、シャロン・イスビンが司会をし、ゲスト講師としてマイケル・ニューマン、

（左より）マイケル・ニューマン、セリル・レフィク・カヤ、シャロン・イスビン

マイケル・アンドリアッチョ、カルロス・ボサ＝リマが参加して行なわれた。

イスビンはレクチャーの中で、パネリストそれぞれのキャリアと業績について解説した。マイケル・ニューマンとローラ・オルトマンについては、ニューヨーク・ギター・セミナーとラリタン・リバー音楽祭の運営と、ギターデュオとしての2人の演奏キャリアについて話した。夫婦でギターデュオであるマイケル・アンドリアッチョとジョアンヌ・カステッラーニについては、彼らが運営しているレコード会社フルーレ・デ・サンのことと、ジョアン・ファレッタ国際ギターコンチェルト・コンクールについて語った。カルロス・ボサ＝リマについては、彼のギター編曲に対する貢献について話した。イスビンが特に強調したのは、あくまでもやり抜く精神で、彼女が作曲家に作品を委嘱したときの経験を話した。作曲家がギターは嫌いだというので、それならば自分の演奏を聴いてくださいと執拗に迫り、結果として、その作曲家の気持ちを変えさせることに成功したという。

この日のイブニング・コンサートでエリオット・フィスクが演奏した曲目は、バリオス〈クエカ〉、〈最後のトレモロ〉、〈ワルツ〉、〈君の心のほとりに〉、ドメニコ・スカルラッティの〈ソナタ〉を5曲、バッハ〈無伴奏チェロ組曲第3番 BWV1009〉、ジョージ・ロックバーグの《アメリカン・ブーケ》からの抜粋、アリリオ・ディアス編曲の〈メレンゲ〉、アルベニス〈朱色の塔〉、エルネスト・アルフテル〈ハバネラ〉、アルベニス〈セビーリャ〉である。

マイケル・ギルシニャンが行なったレクチャーのテーマは、『21世紀の音楽家としての存在』で、個人が音楽的キャリアを追求することに伴う報酬と課題について話した。彼は、コンサート出演の予約の取り方、教職ポストの探し方、新曲の委嘱方法などについて語った。彼は、マンネス音楽院で音楽学修士号を取得しているが、フォート・リー音楽アカデミーのオーナーでもある。

ジョアンヌ・カステッラーニは、『コミュニティーにおけるギタリスト～善良な市民としての音楽家』というテーマで、レクチャーを行なった。ローラ・オルトマン、マリアーノ・アギーレ、カルロ・ヴァルテがゲスト講師を務めた。

ジョアンヌ・カステッラーニは、ギターデュオのパートナーであるマイケル・アンドリアッチョの夫人で、フルーレ・デ・サン・レコード社の経営者であり、ジョアン・ファレッタ国際ギターコンチェルト・コンクールの芸術監督である。

マリアーノ・アギーレは、マンネス音楽院の卒業生で、マンネス音楽院とブルックリン音楽学校で教えている。彼は、歌とギターのデュオであるデュオ・カンタービレのギタリストで、シックス・ハンド・ギタートリオ共同創設者の1人である。

マンネス音楽院の卒業生であるカルロ・ヴァルテも、シックス・ハンド・ギタートリオの共同創設者であり、ギターに加えてウードを弾いている。彼は、マンネス音楽院と、クイーンズボロー・コミュニティー・カレッジとニューヨーク・コレジアムで教鞭を執っている。

ジョアンヌ・カステッラーニは、クラシック音楽を聴く人の数を増やすためには、クラシック・ギタリストが、演奏とレクチャーを通してコミュニティーに参加する必要があると語った。音楽家は、教会や、老人ホームや、子供の集会などで無料のコンサートをすることによって、地域の活動に参加すべきだという。こうした活動は、基本的に経済的な報酬を得られないが、やがて地域社会にその存在が認められれば、仕事の問い合わせが来るようになる。これこそ、若い音楽家にとって、自分たちのプログラムを実行し、ギター教室を始める申し分のないチャンスであり、アマチュア音楽家にとっては、演奏を通じて音楽を愛する人々との接点を持つことになるという。

（左より）アンティゴーニ・ゴーニ、ジョアンヌ・カステッラーニ、マイケル・アンドリアッチョ

金曜日のイブニング・コンサートは、“新進気鋭のスター～最近のマンネス卒業生”と称して、イェン・リー、セリル・レフィク・カヤ、ピエール・フェレイラ・マンシーリャを特集した。

イェン・リーは、バリオス〈フリア・フロリダ〉、〈森に夢見る〉、メルツ〈ハンガリー幻想曲 Op.65-1〉、ロドリーゴ〈小麦畑にて〉を演奏。

ピエール・フェレイラ・マンシーリャは、C＝テデスコ《ゴヤによる24のカプリチョス Op.195》から〈1. フランシスコ・ゴヤ・イ・ルシエンテス、画家〉と〈20. 師匠への贈り物〉、カルロス・グァスタヴィーノ〈ギター・ソナタ第1番〉を演奏。

セリル・レフィク・カヤは、Cinucen Tanrikorur〈Koyde Sabah〉（村の朝）、ピアソラ〈ブエノスアイレスの春〉、ジュリアーニ〈英雄ソナタ Op.150〉、ビセンテ・アセンシオ《内なる想い》から〈静寂〉、パガニーニ《24のカプリス Op.1》より〈第5番〉を演奏した。

アルバロ・メンディサバルが行なったレクチャーのテーマは、『クラシックギタリストのキャリア～音楽業界の展望』で、レコードレーベル、ニッチマーケット（隙間産業）における戦略的なポジション取り、メジャー・アーティストのマネージメントによるバックアップ、PRとコラボレーションを通じたキャリアの確立法に焦点を当てた講義だった。メンディサバルは、クラシックギター・アーティスト・マネージメント会社の1つであるP＆Rコンサート・アーティスツ社の創設者でありマネジャーである。

ゲストアーティストによるセミナー最後のコンサートは、ローラ・ギルバートのフルートとアンティゴーニ・ゴーニのギターによるデュオ演奏だった。アンティゴーニ・ゴーニは、2004年以来ブリュッセルの王立音楽院で教えているが、『夏季ギター教室』という Volterra Project の創設者であり、芸術監督である。

2人が演奏したのは、ホセ・ルイス・メルリン《Al Cristo de la Quebrada》の第4楽章と〈Joropo〉、マノス・ハジダキス《Giokonda's Smile》より第2楽章、ミキス・テオドラキス〈エピタフィオス第3番〉、デュージャン・ボグダノヴィチのギター独奏のための《ミューズへの讃歌》の全6曲、フルートとギターのための〈Songs and Dances from the New Village〉の全5楽章、武満 徹のフルートとギターのための《海へ》の全3楽章、シリシュ・コルデのフルート独奏のための〈Tenderness of Cranes〉、アタナス・ウルクズノフのフルートとギターのための《ソナチネ「テオデッシ・スパソフ讃歌」》の全3楽章である。

来年のニューヨーク・ギター・セミナーは、6月25～29日の間、マンネス音楽院で開催される。テーマは『総合大学におけるギターについて』である。